



池田榮史氏

令和三年度の國學院大學研究開発推進機構公開学術講演会は、統一テーマ「蒙古襲来の実態とその影響」のもと日本文化を知る講座とあわせて開催し、池田榮史氏(研究開発推進機構教授)が講師を務め、「水中考古学による蒙古襲来研究」と題しておこなわれた。

水中考古学とはどのような研究方法か、その学問の歴史とわが国への導入、とくに蒙古襲来にかかわるきわめて豊富な遺物―とくに沈没船―が遺る可能性が高い鷹島(神崎)海底遺跡(長崎県松浦市)のこれまで

公開学術講演会

「水中考古学による蒙古襲来研究」

池田榮史(國學院大學教授)

の調査のようすとその成果の紹介、および水中考古学をめぐる技術的な学問的課題にかんする講演である。

新型コロナウイルス感染症の影響により、講演の様子を撮影し、YouTubeで配信した(令和四年三月三十一日まで配信)。

●蒙古襲来(元寇)の基本的確認
まずは蒙古襲来の通説的理解について整理をおこなった。

蒙古襲来とは鎌倉中期の文永年間(蒙古軍九〇〇艘・三万九〇〇〇人(女真族の再編部隊、高麗部隊ほか)で九州の博多に侵攻した文永の役と、弘安年間に四四〇〇艘・一四万人(江南軍・南宋の再編部隊、東路軍・高麗部隊)の大軍をもって対馬、そして壱岐を経つ博多に再来した弘安の役の両役の総称である。弘安の役の際、中国を発つた江南軍は

いったん平戸の周辺へと集合し、そこから東航して伊万里湾に入り、その後博多湾へ侵攻することを目論んでいたようだが、伊万里湾で暴風雨に遭い、江南軍の七〇八割が被害を



Vol.15 No.2
 発行人 笹生 衛
 編集人 大東 敬明
 〒150-8440 東京都渋谷区東
 4丁目10番28号
 電話 (03) 5466-0104
 FAX (03) 5466-9237

目次

- ◆ 公開学術講演会
 - 「水中考古学による蒙古襲来研究」池田榮史(文責・比企貴之)……………1頁
 - 第四十八回日本文化を知る講座
 - ◆ 蒙古襲来の影響を多角的に考える(比企貴之・大東敬明・齋藤公太)……………3頁
 - ◆ 國學院大學研究開発推進機構 神社本庁総合研究所
 - ◆ 「研究協力に関する覚書」の締結(半田竜介)……………6頁
 - ◆ 日本文化研究所国学プロジェクト
 - ◆ 「成果刊行物『歴史で読む国学』の刊行」(武田幸也)……………7頁
 - ◆ 日本文化研究所
 - ◆ 国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る Capturing Japanese Religious Culture」
 - ◆ 関連講演会「日本と宗教 一生の記憶」(星野靖)……………8頁
 - ◆ 研究開発推進センター
 - ◆ 渋谷学シンポジウム「東京渋谷を科学する
 - ―歴史・民俗・宗教から見た渋谷学の今後、そして可能性―」(宮本誉士)10頁
 - ◆ 國學院大學博物館
 - ◆ 特別展「日本書紀」撰録二三〇〇年―神と人とを結ぶ書物―(渡邊卓)……………11頁
 - ◆ 國學院大學博物館
 - ◆ 企画展「ホワツツ神道―神道入門―」(吉永博彰)……………12頁
 - ◆ 企画展「アイヌプリ―北方に息づく先住民族の文化―」(深澤太郎)……………13頁
 - ◆ 國學院大學博物館活動報告(國學院大學博物館)……………14頁
 - ◆ 彙報……………16頁
 - ◆ 資料紹介「沢沢栄一書翰」(渡邊卓)……………16頁

うけた。

●蒙古襲来とその前後の経過(概略)
蒙古軍(江南軍)が大きな損害を被つた伊万里湾の湾口には、鷹島という島がある。伊万里湾一帯では、蒙古襲来ときの遺物とされる壺などが漁業関係者の網に掛かつて揚げられるということがかつてあった。そのなかでも北上する台風や強い南寄りの風の関係によるものか、飛び抜けて遺物が揚がる頻度が高かった場所こそ鷹島の南海岸側であったと説明し、鷹島の水中考古学調査の学術的意義を明確にする。

●鷹島(神崎)海底遺跡調査の歩み
そこで水中考古学をめぐる学問の歴史や日本への導入について振り返った。

まずこうした鷹島の海底の遺物についての研究に取り組むためには、水中考古学(Underwater Archaeology)と呼ばれる、水中遺跡(常時または満潮時に水面下に位置する遺跡)の調査研究をおこなう学問手法によることとなる。水中考古学という学問の原形は、地中海に沈んだギリシャやローマ時代の沈没船とその積み荷が経済的価値の高まりを生み、やがて水中の遺跡そのものへも関心が高まったルネッサンス期に形づくられた。当初は海綿取りに従事する人びとらが素潜りで遺物の採取をおこなっていたが、近代にアクアラングという潜水機器が発達したことで学問としての様相はいよいよ整っていった。

日本へアクアラングが導入された一九七〇年代以降、次第にわが国でも水中遺跡への関心が高まってい

く。折しも北海道の江差港の沖合に、旧江戸幕府の海軍の戦艦で榎本武揚も乗艦した開陽丸(江差侵攻の際遭難し座礁)が沈んでいることが判明し、一九八〇年代以降、その発掘がおこなわれたことが本格的な水中考古学調査の始まりであった。

そして蒙古襲来の痕跡を探る調査にも水中考古学の利用が考えられるようになり、伊万里湾の鷹島に注目が集まった。その最初の調査は一九八〇〜八二年にかけておこなわれ、海底に縄文時代の遺跡の存在が確認されたこと、鷹島南岸域にはやはり蒙古襲来時の遺物が数多く分布している事実が確認されたことなどの成果をえた。

その後水調査や音波探査などが実施され、さらに一九九五〜二〇〇〇年代にかけて神崎港離岸堤工事で大型の木製いかりが検出された。これにより元軍船が鷹島に停泊したことが裏付けられ、蒙古襲来にかかわる水中考古学の学問的可能性が大いに示されることとなった。

二〇〇〇年代には神崎港の改修工事が始まり、それにもなう緊急発掘調査が実施された。検出された遺物には、陶磁器とくに陶壺が圧倒的な量を占めるのを始めとし、磚(煉瓦。パラスト材を兼ねる)、日本産の土師器・瓦器・須恵器、鎧兜の金具・装身具などの青銅製品、硯・碇石・砥石の石製品、漆製品や木製の仏像ほか、その種類は多岐にわたる。

なかでも『蒙古襲来絵詞』で蒙古兵の武器として描かれたことで有名な土製品「てつはう」の不発弾のX線CTスキャンからは、火薬に鉄破片や陶磁器片を混ぜた、きわめて殺傷力の高い兵器であることが判明したという。

●科学研究費による鷹島(神崎)海底遺跡の調査研究

続いて池田氏を中心とした科研究費による調査研究プロジェクトのようすとその成果について振り返った。

二〇〇五年以降の調査における課題は、沈没しているはずの元軍船の発見であった。そこで改めて地上における考古学調査の方法と同様に、海底の正確な地図と堆積の状況といった地質情報の整備が求められた。Sea Bat(超高分解能フォーカスドマルチビーム測深システム)など海底地質研究の機器を利用し、きわめて精度の高い地図・地層情報がえられた。その後も松浦市教育委員会とも連絡を取りながら、新たな装置を導入するなどした結果、伊万里湾のなかでもとくに元軍船埋没の可能性が高いポイントを絞り込むことに成功した。その後、詳細調査をおこない、鷹島一号沈没船、鷹島二号沈没船(4頁ボスターの沈没船)を立て続けに発見した。なお、両沈没船については、その規模が大きいために現状では引き揚げをすることは難しく、海底現地での保存手法の確立が焦眉の研究課題となっていることを述べられた。

水中考古学によって遺物・遺跡に辿り着くためには、地図情報・地層情報の整備とその綿密な分析が必須であることが確認された。水中考古学の研究手法のその手順が確立されたことは水中考古学という学問において非常に意義深いことであった。

●確立した調査手法と進行過程

調査により確立された水中考古学調査の手順と現状の課題は次の通りである。

海底遺跡の調査手順は、①海底詳細地形・地層情報の獲得／②上記情報

③調査候補地点への誘導(海底への目標物設置による海底位置の確認)／④鉄棒による突き刺し反応確認(手作業)／⑤試掘調査(調査区五メートル×五メートル)／⑥本調査(映像記録化作業、図化作業の実施)

⑦検出遺構・遺物(船体や陶磁器など)の埋戻し／⑧情報の公開と正式調査報告書の作成／⑨保全状況の継続的確認作業(モニタリング)の実施／⑩船体・遺物の引き揚げと保存処理作業の実施／⑪保存処理後の船体・遺物の公開。しかし、現在は海底に船を置いた状況であり、⑩⑪については文化庁や当該自治体の教育委員会、研究者コミュニティ、他分野との協力が強く望まれる。

●鷹島海底遺跡における調査成果

配信動画では、ここで水中調査のようすを動画を用いて解説した。鷹島一号沈没船と鷹島二号沈没船の竜骨(キール)や、竜骨を中心平行に並んだ板材、隔壁と呼ばれる板材などの存在が確認でき、ここからこの船は竜骨を軸にV字型に船底を立ち上げていく構造の船だったことが判明する。とくに隔壁で船底を仕切る構造は、中国の造船にみられる特徴であり、東路軍が乗船したであろう高麗の船の場合には竜骨を持たず木材を接合して横に並べていく平底の船である。つまり鷹島一号沈没船と鷹島二号沈没船は、中国を意味した江南軍の船であることを意味している。さらにその他の遺物も旧南宋に出自を持つと思しいものが大量に検出されていることも、これを裏付ける証左である。

●鷹島海底遺跡の今後の課題

けれども現時点で発見されている沈没船は、元軍船四四〇艘のうち

の江南軍三五〇艘の七〜八割は伊万里湾周辺海域で遭難したと推定されていることを考えれば、三〇〇艘近くの船がここで遭難したはずで、沈没船はもつと多いに違いない。そして鷹島一号沈没船と鷹島二号沈没船は、構造は似ているものの大きさは微妙に異なる。竜骨材の幅や長さが一様ではないので船団を構成する各船の大きさは区々だったと推測される。三五〇艘もの船の調査にあたっては、既存の船や非画一的なサイズ

の船なども相当数徴用していた可能性が高い。こうした点の解明には、さらに多くの調査事例を増やしていくことにより、当時の中国船の構成などが明らかになるはずである。また二隻の船を引き揚げることが出来ていないことも課題となっている。現状ではよりよい方法を選択して埋め戻しをおこなっているが、これが適切であるのか否か。船体を海底現地において保存する手法を考へること、あるいは引き揚げた際にどこでどのようにして保存処理するかは、現在進行形で研究がおこなわれている。

とところで、蒙古襲来を異なる角度からみるならば、四四〇艘もの船が暴風雨のために一挙に遭難するというのは、世界史上最大の海難事故でもある。海事研究の関心からも世界的な共同研究を進める必要がある。

そして、最後にこれらの課題に取り組むには、日本に水中考古学の拠点的研究機関の設置が必須であること、若い世代をはじめとする人材の育成も重要であること、その際、國學院大學においても水中考古学や蒙古襲来に関心をもってもらい、研究の進展と人材の育成がおこなわれることを切に願われ、講演を終えられた。(文責・比企貴之)

第四十六回日本文化を知る講座 「蒙古襲来の影響を多角的に考える」

開催の趣旨

令和三年度の公開学術講演会と日本文化を知る講座は、統一テーマとして「蒙古襲来の実態とその影響」を設定し、公開学術講演会「水中考古学による蒙古襲来研究」および日本文化を知る講座「蒙古襲来の影響を多角的に考える」をYouTubeを利用してオンライン公開講座として開催した(公開学術講演会は「二頁参照」)。

前近代の日本に未曾有の対外的危機として起こった蒙古襲来については、これまで様々な学問分野からアプローチがおこなわれてきたが、そうした異なる立場から浮かび上がる蒙古襲来像を互いに関連付けながらみていったとき、そこにはどのような蒙古襲来像が立ち現れるのか。このような関心のもと、日本文化を知る講座では「蒙古襲来の影響を多角的に考える」というテーマを設定し、蒙古襲来という歴史的事件がその後の日本の歴史や文化に如何なる影響を及ぼしたのか、比企貴之(歴史学)、大東敬明(神道史)、齋藤公太(思想史)という専門を異にする三名の講座担当者から報告がおこなわれた。

研究開発推進機構としても、異なる学問分野の研究者同士の連携や共同を通じ、学際的な立場から今後ど

のような教育・研究への取り組みが考えられるかを探る貴重な機会となった。令和六年は文永の役から七五〇年の節目にあたることから、研究開発推進機構としても展示や講座の開催などを計画している。以下に各講師による報告の要旨を掲載する。

①史料からみる

異国降伏祈禱の虚像と実像

比企貴之(本学特任助教)

モンゴル襲来の際、日本側では九州を中心とした軍勢動員や元寇防壁の構築、防備体制としての異国警固番役の整備といった現実的対策を練る一方、朝廷や鎌倉幕府は寺院・神社にたいし「異国降伏(ごうぶく)」を目的とした祈禱命令を下していたことは有名である。ここにち菅崎宮(福岡県福岡市)の楼門には「敵國降伏」の額が掲げられているが、これは文永の役後、モンゴル軍の脅威を目の当たりにした龜山天皇が奉納した宸筆から作成された額である。モンゴル襲来を語るうえで「異国降伏」の語はじつに象徴的な字句である。

「異国降伏」の語の強烈な印象は、学術研究の場にも浸透している。例えば『大日本史料』編纂のための草稿として明治・大正期に作成された史料稿本(東京大学史料編纂所「大

日本史料総合データベース」で公開)では、モンゴル襲来にかんする史料を列記してそれらに「異国降伏ヲ祈ル」といった網文を付す。ほかにも比較的最近の編纂物『神宮史年表』『石清水八幡宮史』『春日大社年表』など、個々の神社で独自に編まれた史料年表でも「異国降伏」の字句は当然のように使用されている。モンゴルの襲来を契機とした祈禱は、文永の役・弘安の役を問わず、のべつ「異国降伏」祈禱と考えられてきた一種の常識的な理解とあってよい。

ところが、神社の祈禱にかかわって「異国降伏」の字句が使用される状況には、違和感がないではない。「降伏」とは「調伏(じょうぶく)」とも記される、仏教とくに密教に由来する言葉であるからである。「調伏」とは、「敵意ある人を信服させ、障害を破ること。」(『佛教語大辞典』)とあり、その際の具体的な手段としておこなわれるのが、壇を組み、燃えさかる火焰の向こうに本尊を据え、僧侶が一心不乱に加持祈禱する「修法(しゅほう)」である。修法はその目的に応じて、出世を目的とする敬愛法、富徳を目的とする増益法、健康を目的とする息災法、そして怨敵・悪魔の降伏および除災を目的とした調伏法が使分けられた。従来、モンゴル襲来に際し、神社とくに神社において実施された祈禱も当然のように「降伏」を目的としたものと考えられてきたけれど、史料に基づいて、神社でいかなる祈禱がおこなわれていたのか見直す必要があるだろう。

まずは文永の役の前後のころ、伊勢神宮、石清水八幡宮で祈禱がおこなわれたことを示す史料をみると、例えば祈禱の目的に言及する箇所では「未然に払い退け給ひて、玉体は安穩に、赤梟は無為に護り幸い給へと(原漢文。以下史料は同)」とするものや「蒙古賊徒の御祈りによりてなり」などと記すものもある。前者はその祈禱の目的が危機の未然防止・天皇の身体護持・京の守護であることが明白であり、後者に至ってはもはや異国関係祈禱であったことを示すに過ぎない。そして神社での祈禱をめぐるこのような記載状況は、他の主要な神社においても概ね共通している。これに対し寺院での祈禱の実施を示す史料には、東寺の場合「異国調伏のために修す」とあり、仁和寺では「異国降伏のためのお祈り」、延暦寺でも「異国降伏のため」として、いずれにおいてもその目的が異国降伏であったことが明示される。わずかな事例に依拠したに過ぎないが、文永の役段階においては、神社では危機の回避や天皇・京の守護を意識した祈禱がおこなわれていたのであり、降伏を目的とした祈禱をおこなっていたのは主として寺院の側なのであった。

ところが、モンゴル軍の再来(弘安の役)が想定され始めると、神社では前回と同様の奉幣や祈禱が実施されたことに加え、当時の顕密仏教界の高僧らが伊勢神宮に派遣されたり、あるいは神仏習合の顕著な神社ではその社僧らによって降伏のための修法や祈禱が勤修されるように



なっていく。
従来、モンゴル襲来に際し、日本側の対応として神社ではのべつ異国降伏祈禱がおこなわれたと理解されてきたが、関連史料の読み直しを通じてこうした評価が「虚像」であることが明らかになった。本来、国家的危機に際して神社の神職に期待されたのは「災いを未然に払い退ける」いわゆる折禳であり、実際、文永の役段階ではそのように対応が図られていた。しかし、モンゴル襲来の衝撃を受け、来る再来に向けて神仏習合の組織や環境の整っている神社ではその社僧が、あるいは伊勢神宮のごとく伝統的に仏教との距離を保っていた神社へは顕密仏教界のなかでも高僧というべき人びとが派遣されるなどし、神社境内においても異国降伏祈禱が実施されていくという「実像」が明らかになった。こうしてモンゴル襲来関連祈禱は、次第に神々絵出の「神戦」の様相を帯びていったのであった。
(文責・報告者)

②中世における
神話の変貌と神功皇后譚

大東敬明(本学准教授)

国学院大学図書館 特別列品「神の新たな物語―熊野と八幡の縁起―」(会期：令和三年(二〇二二)五月十三日～七月三日)では、中世の神話の変貌と、熊野の神々や八幡神・神功皇后の縁起を扱った。本報告では、蒙古襲来の影響を、中世における神話の変貌や八幡信仰をめぐる神々の物語から概観した。
『三種神祇卷』(国学院大学図書館所蔵)は、三種神器(神璽・宝剑・内侍所)について語るもので、『劍卷』(屋代本『平家物語』、同所蔵)と共通点がある。また、同図書館が所蔵する『山王七社大事』、『三種神祇卷』、『神祇卷秘決集』、『御流靈氣集』、『内宮外宮口伝』、『日本記当流卷』より構成される一群の神祇書のうちの一書である。
『三種神祇卷』や『劍卷』には、次のような神話が伊勢の神宮における仏教忌避の理由として記される。天照大神は国(日本)を領有すべきであったが、第六天魔王が狙っていた。天照大神が魔王に「自分は仏教を広めないし、仏法僧も無いようにする、更に自分の前に僧を迎えない(退ける)」と誓うと、魔王は納得して、日本を譲った。その印が神璽である。草薙の剣が海に沈んだ理由を述べた神話としては、「風水竜王が八俣の大

蛇に変化したときに、素盞烏尊に草薙の剣を奪われた。憤りが深く、その後も日本武尊を襲うなどしたが取り戻せなかった。今度、安徳天皇と生まれ、後に作られた剣ではあるが、取り戻して海の底に沈んだ、とある人が夢に見た」と記す。
これも、『三種神祇卷』『劍卷』ともに見える説話で、現実の物語的な説明となっている。
八幡神(八幡大菩薩)の神話も中世に変貌した。この神は、九州(宇佐神宮)においてその信仰が始まり、中央においても信仰されるようになる。奈良時代後期～平安時代前期頃に応神天皇と結び付けられ『日本書紀』仲哀天皇・神功皇后の巻から、縁起が形成された。
『八幡愚童訓』は蒙古襲来を契機として、十三世紀末～十四世紀前半に石清水八幡宮関係者によってまとめられた書であるとされ、八幡神(応神天皇・八幡大菩薩)の縁起や神徳について記す。同書の応神天皇及びその母である神功皇后説話(神功皇后譚)は、後の八幡宮縁起のものととなった。
『八幡愚童訓』に記される蒙古襲来についての記述は、史実と合わない「神話」であることが指摘されている。この史実と合わない点こそ、八幡神の神徳を示すために行った神話・史実の再構成であると考えれば、鷹島海底遺跡調査の成果を始めとする史実と比較することで、その一端を明らかにできると考える。
『愚童訓』下では、異国からの防

御の神徳として、神功皇后が海水を

上げ(早珠・満珠)、文永には猛火を出し(菅崎宮)、弘安には大風を吹かせた(鷹島)とし、これを「三災」(大三災・宇宙の破滅期における風・水・火の災害)と結びつける。「大三災」に注目するならば、『愚童訓』において、八幡神の護国の神としての神徳は、先行する説話や史実を種として水・火・風との関わりを強調する構造をとっているといえる。これにより、史実の神話化・物語化がなされたとすれば、神功皇后神話の形成にも影響を与えているだろう。この後、水に関わる神功皇后神話は独立し、八幡宮縁起として享受された。室町時代～江戸時代には数多くの絵巻物が作られ、流布した。その背景には八幡信仰の全国的な流布が挙げられる。
蒙古襲来の影響がみえる物語に『百合若大臣』があり、十六世紀には成立していたと考えられる。この物語ではまず、「む国の蒙古(ムクリ、蒙古の蒙古人)」が蜂起する。これは、日本は魔王(第六天魔王)が様々な不思議をおこす一つとされる。また、この蒙古は、神々が起こす風や長谷寺の観音の申し子である百合若によって撃退される。また、百合若が蒙古を討つために「ちくらが沖」へ向かう際には、神功皇后の故事が挙げられる。物語の後半では宇佐八幡宮が重要な役割を果たす。このように、物語の背景には、神話の変貌や『八幡愚童訓』をもととした中世の八幡宮縁起や中世の神話がある。
中世には神々をめぐる物語が変貌

する。その一つである「八幡愚童訓」では、「蒙古襲来」という記憶に残る出来事を八幡神の神徳と結びつけ、「大三災」(水・火・風)などの概念を用いながら説明する。「水災」に関連付けて形成された神功皇后説話は、「八幡宮縁起」の一部として流布した。その影響は、『百合若大臣』にもみられた。

(文責・報告者)

③「神風」と「神国」

解釈の思想史をめぐる素描

齋藤公太(神戸大学大学院講師)

「蒙古襲来」として知られる文永・弘安の役と、その時に吹いた暴風という出来事は、民族の集合的「記憶」としてその後の日本の歴史のなかで繰り返し呼び起こされた。それはしばしば「神国」と結びついた「神風」という概念により解釈された。そのような解釈はどのようにして形成され、また近代に至るまでどのように変遷していったのか。本報告は、こうした解釈の系譜を思想史として読み解くための素描的試みである。

「神国」という言葉の初出は『日本書紀』に見出される。それは「新羅の王」の言葉として語られており、国際情勢を背景とする対外的文脈における意味を持つていたことがわかる。

他方で上代における「神風」の用例はほぼ「伊勢」の枕詞としてのものだった。しかし例外的に『万葉集』に収録されている柿本人麻呂の高市皇子挽歌では、伊勢の神の神威を表す意味で用いられている。その後奈

良時代から院政期まで「神風」の用例は消滅し、新古今集の時代に復活した(山村孝一「歌語「神風」考」『日本文学』四六巻五号、一九九七年五月)。いずれにしても、「神風」は対外的文脈で用いられる言葉ではなかった。

「神国」にまつわる言説が盛んに語られるようになるのはおおよそ院政期以降であり、文永・弘安の役を契機としてさらに興隆していった。この「神国」言説を背景にしつつ、弘安の役における「大風」に言及するテキストが形成されていく。『八幡愚童訓』や『神皇正統記』、『増鏡』などの言説では、「神風」という概念を用いるか否かにはまだ揺れが見られるものの、神が暴風を起こしたという認識が浸透していることがわかる。

これら中世のテキストの執筆目的は様々であるが、対外的危機感が薄まり、蒙古襲来という出来事を一つの象徴として利用している点は共通する。また、末法思想を背景として、神と人が隔絶した状態にあると認識する一方で、「神国」であるがゆえに神がこの世に顕現した現象として「神風」をとらえる点も共通している。

近世に入り徳川時代の十七世紀後半になると国際情勢も安定化していったが、「泰平」と出版文化の興隆のなかで日本の歴史への関心が高まり、蒙古襲来についても研究が進展した。そして垂加神道や国学の神観念によって「神風」が解釈されるようになる。とりわけ本居宣長や埴

保己一といった国学者の言説において、蒙古襲来と「神風」が再び結びつけられた。神と人の隔絶という中世的な認識はもはや受け継がれておらず、「神風」は時代にかかわらず起こりうる神威と理解されたが、あくまで過去の出来事とされた。

近世後期に西洋列強の脅威が迫ると、国学者は再び「神国」の「神風」に着目するようになる。橘守部『蒙古諸軍記弁疑』など、対外的危機感を意識した蒙古襲来研究が行われ、また神威により目前の「夷狄」を滅ぼす願いを込めて、多くの「神風」歌が詠まれた(吉良史明「歌語「神風」変容の内実」『近世文藝』一一三号、二〇二一年)。かくして幕末の国学者により、対外的危機と結びつけられた「神風」の言説が定式化されたが、それは「文明開化」の進む近代では容易に受容されなかった。たとえば明治二四年(一八九一)に刊行された文部省総務局図書課校定『高等小学歴史』巻之二では、弘安の役における日本の武士の奮戦が強調されているものの、「颱風」は偶然吹いたものと説明されている。

他方で対馬海峡での海戦を含む日露戦争は、蒙古襲来のイメージを再び喚起した。「弘安の神風と日本海海戦」(一九〇五)のなかで、佐伯有義は日本海海戦における勝利を弘安の役の「神風」と重ね合わせ、神々の助力によるものと主張している。しかし、佐伯のような視点は当時ではむしろ稀であっただろう。

その後昭和初期になると、ナショナリズムに基づく「国家改造」を目

指した「昭和維新」運動の言説において「神風」の語が再発見された。それがただちに社会全体に浸透したわけではないが、軍部の台頭とともに日本主義が興隆していくにつれ、このような語法も徐々に広まっていく。とりわけ昭和一六年(一九四一)に太平洋戦争が勃発すると、危機的な海戦という共通性もあってか、「神風」の用例が急増する。そして昭和一九年(一九四四年)に神風特別攻撃隊の創設を見るに至る。当時の徳富蘇峰らの言説では、日米の軍事力の差を背景として、神の加護を信じるというよりはむしろ人間の主体性に呼応するものとして、すなわち「精神」のあり方として「神風」が再解釈されていることがわかる。

以上見てきたように「神風」という概念は古代から一貫して同じ意味を持っていたわけではなく、時代の変化のなかで新たな意味が込められながら受け継がれてきた。とりわけ蒙古襲来以降、「神国」という概念と結びつきながら特別な意味を帯び、対外的危機の時代にたびたび呼び起こされるに至ったのである。

同時に「神風」や「神国」という概念の意味は、「神」をいかなるものとしてとらえるかという信仰や学知の問題と切り離せないことも明らかだろう。各時代における「神風」の解釈を理解する上では、このような信仰と学知のあり方を解明していくことも必要といえる。

(文責・報告者)

「研究協力に関する覚書」の締結

覚書締結に至る経緯

國學院大學研究開発推進機構はこのほど、神社本庁総合研究所（田中恆清所長）との間で、今後の研究協力活動の推進に向けた「研究協力に関する覚書」（「國學院大學研究開発推進機構と神社本庁総合研究所との研究協力に関する覚書」）を締結した。

これまで研究開発推進機構では、神社本庁総合研究所との連携の下、國學院大學が採択・選定されてきた文部科学省の21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」（平成十四年度）

十八年度）やオーブン・リサーチ・センター整備事業（ORC）「モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践」（平成十九年度～二十三年度）、私立大学研究ブランディング事業「『古事記学』の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―」（平成二十八年～令和元年度）といった大型の研究プロジェクトをはじめ、神社本庁被包括神社を対象として実施された「神社祭祀と御神木に関する調査」（平成二十二年～二十三年）などの研究活動を協力して推進してきた。こうした研究協力体制は現在も継

続しており、研究開発推進センターが中心となつて、神社本庁が所蔵している『皇國時報』（全国神職会の機関誌）の総目次作成等を実施してきた経緯がある（『皇國時報』総目次については『神社本庁総合研究所紀要』一六号、二二二号、二三二号、二四号、二五号、二六号に掲載されている）。

このたびの覚書は、こうした実績を踏まえて締結に至つた。研究開発推進機構と神社本庁総合研究所との間のかねてからの研究協力体制を再確認することで実質化を図り、今後とも継続的かつ柔軟な研究協力活動を推進することを目的に新たに結ばれたものである。

研究開発推進機構において神社本庁総合研究所との間の研究協力の実務を担う研究開発推進センターは、國學院大學の「建学の精神」のより一層の闡明・明確化を目的に実施されたCOE事業の継承を担っており、神道・日本文化研究のさらなる発展を目標に、院友神職会をはじめとする神社界からの指定寄附金等の外部資金を基に研究事業の企画・立案及び実施をしている。神社界との連携に関しては、霧島神宮（鹿児島県）や北海道神宮（北海道）、そして乃木神社（東京都港区）からの依頼に基づき神社史や祭祀に関する刊行物の編纂を行っている。

令和三年十一月五日（金）には神社本庁庁舎（東京都渋谷区）において実務を担う研究開発推進センターの松本久史センター長と神社本庁総

合研究部の浅山雅司部長とが覚書を交換した。

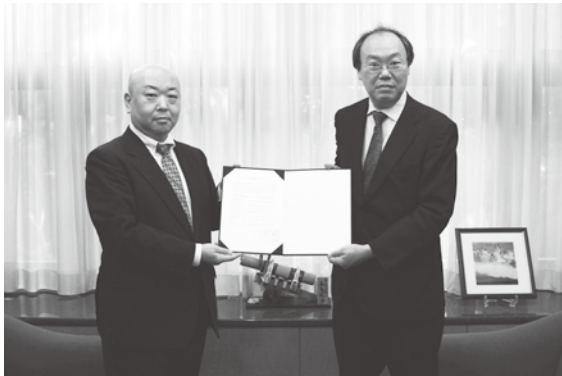
覚書の趣旨

今回締結した覚書の中では、研究協力活動を円滑に推進するために協議の場を定期的に設けることや、協議の実務は研究開発推進センターと神社本庁総合研究所とがそれぞれ担当すること、研究開発推進センターで実施する研究事業を研究協力の主たる対象にすることなどを明記している。また、今後の研究事業の実施によつて得られた研究成果の帰属や公開・活用方法については、研究開発推進機構と神社本庁総合研究所との協議によつて定めるものとしている。

右の覚書に基づいて、令和三年十二月二十四日（金）には第一回の協議の場が設けられた（十六時～十七時、於AMC棟五階会議室〇六）。松本センター長と浅山部長を中心に、『皇國時報』総目次を掲載する冊子刊行に向けた編集作業や、近代の神社関係法令をまとめた「明治期神社関係法令資料集成（仮称）」等の作成など、今後の研究事業の推進に向けた、具体的な研究協力のあり方や方法などについて意見を交わした。

今後も研究開発推進機構と神社本庁総合研究所との間で協議を重ねながら、研究協力活動のさらなる推進を行つてゆく。

（文責・半田竜介）



覚書を交わす
浅山雅司部長（左）と松本久史センター長（右）

日本文化研究所国学プロジェクト 成果刊行物『歴史で読む国学』の刊行

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の「神道・国学研究部門」は、本年度(令和三年度)の研究プロジェクトを「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の成果公開とデータベース再構築」とし、これまで日本文化研究所において蓄積されてきた「神道・国学」に関する研究成果の発信を主たる目的とした単年度事業を推進してきた。

『歴史で読む国学』(ペリかん社、令和四年三月刊行予定)の刊行は、このようなプロジェクトの成果発信の柱として位置づけられるものである。

以下、ここでは本書刊行に至る経緯と内容について若干の説明を行うこととしたい。

研究開発推進機構の前身となった旧日本文化研究所は「日本文化に関する精深な研究を行い、これを広く世界文化と比較しつつ、民族的伝統の本質と諸相を把握」することを目的として設立された。これは設立準備委員の柳田國男が「万邦無比」主義ではない日本文化研究の必要を主張したからである。このことは戦後の状態を踏まえ、「新たな国学」の樹立を目指したものであった。

特に国学の研究については、昭和五十年代、当時の所長、内野吾郎氏が提唱した「日本文化学としての新国学」樹立を目指した事業があり、

研究所のプロジェクトを一つに統合し、日本文学・文献史学・民俗学・国語学・宗教学・神道学の各研究者が共同した研究を展開し、昭和五十七年にはシンポジウム「日本の近代化と国学—アジアの近代化と民族文化の発見にむけて—」を開催するなど研究成果を蓄積してきた。こうした研究は、これ以後も鈴木淳氏(元國學院大學教授・国文学研究資料館教授・副館長)や阪本是丸氏(元研究開発推進機構長、國學院大學名誉教授)らの教員に引き継がれ、「国学」を対象とする研究が推進されてきた。

また、平成十九年には研究開発推進機構が発足し、日本文化研究所が改組されて機構内の共同利用研究機関に位置づけられたが、その際も研究部門として「神道・国学研究部門」を設け、「神道」や「国学」を対象とする研究を継続してきた。

具体的には、以下の通りである。

- ・「近世国学の靈魂観をめぐる思想と行動の研究」
- ・「近世国学の靈魂観をめぐるテキストと実践の研究—靈祭・靈社・神葬祭—」

- ・「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の構築
- ・「國學院大學 国学研究プラットフォーム」を拠点とする国学の「古事記」解釈の研究

- ・「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開—明治期の国学・神道関係人物を中心に—
- ・「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の展開と国学史像の再構築

さらに、ここまでの研究成果の回顧と展望を目的として、国際研究フォーラム「二十一世紀における国学研究の展開—国際的・学際的な研究発信の可能性を探る—」を令和二年二月に開催し、令和三年に報告書を刊行した。その際、同時に本書『歴史で読む国学』の刊行も計画されていたが、折悪しくコロナウィルス感染症の拡大があり、計画は本年度の「國學院大學 国学研究プラットフォーム」の成果公開とデータベース再構築」へ引き継がれることとなったのである。

さて、右のような日本文化研究所での国学研究の経緯を踏まえつつ、本書の刊行が企図されたが、その目的は、国学に関する学説史・研究史の整理を行い、最新の研究成果を反映した通史的な国学史像を打ち立てることにあつた。これは、従来の国学の歴史に関する叙述が、ややもすると主要な国学者の事績を年代順に並べるような、いわば「伝記体的な国学史の記述が多く、通史的な国学を見通した本が必ずしも多くなかったからである。

そのため本書の目次は次のような構成となっている。

- 一、元禄期 徳川光圀と契沖
- 二、宝永〜享保期 荷田春満の活動を中心に
- 三、元文〜延享期 荷田春満・賀

- 四、宝暦・明和期 賀茂真淵と本居宣長
- 五、安永・天明期 多様化する国学
- 六、寛政期 復古の諸相
- 七、享和〜文政期 宣長学の継承と平田篤胤の登場
- 八、天保期〜ペリー来航 本居派・平田篤胤と草莽の国学
- 九、ペリー来航後〜慶応三年 平田派・本居派の動向と尊攘運動
- 十、明治元年〜八年 明治新政府と国学者
- 十一、明治八年〜二十三年 「明治国学」の成立
- 十二、明治中期〜昭和二十年代 「新国学」の提唱
- 十三、明治後期〜現在 「国学」研究の近現代史

コラム・年表

このように本書は、近世のはじめから国学の展開を跡づけ、現代における「国学」に関する研究までを視野に入れ、日本史の展開に沿った「編年体」の国学史の構築を目指したものである。これは、日本史の中の国学の意義をわかりやすく叙述し、教育に還元することも意図したからである。なお、附録として国学に関連するコラム数本と年表を掲載した。

このように、本書は研究成果を一般社会へ還元することを企図した概説書であるため、今後、学部や大学院教育との連携をも視野に入れ、講義等で活用していく予定である。

(文責・武田幸也)

日本文化研究所

国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」

関連講演会「日本と宗教 一生の記憶」

Capturing Japanese Religious Culture]

をめぐりに一般公開されている。

日本文化研究所では、二〇二一年一二月に二〇二一年度国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」を企画・開催し、また関連企画としてヘイヴンズ・ノルマン氏(本学名誉教授)による講演会「日本と宗教：一生の追憶」を一月に開催した。以下概要を記す。

◆講演会「日本と宗教：一生の追憶」
日時：二〇二一年一月二七日(土) 一五時～一七時

場所：Zoomによるオンライン開催
講演者：題目：・ヘイヴンズ・ノルマン (Norman Havens) (國學院大學名誉教授)

「日本と宗教 一生の追憶」
コメンテーター：・井上順孝(國學院大學名誉教授)

・ケイト・ナカイ(上智大学名誉教授)
司会：吉永博彰(日本文化研究所)
参加者：四〇名程度

本国際研究フォーラムの関連企画として、二〇一九年度を以て本学を定年退職されたヘイヴンズ氏の講演会をオンラインで開催した。当日は井上氏、ナカイ氏よりコメントを得て、感慨深い催事となった。なお、この講演の動画は、本学「動画アーカイブ」において、年度末まで

◆国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る Capturing Japanese Religious Culture」
日時：二〇二一年二月一日(土) 一三時半～一七時半

場所：Zoomによるオンライン開催
講演者：題目：・大河内智之(和歌山県立博物館主任学芸員)

「仏像の3D計測と」お身代わり仏像」―仏像盗難と地域社会の現在―
・ティム・グラフ(南山大学助教)

「しまドキュメンタリーを撮るとどうこと―寺院のCOVID-19対応から考える―」
・山咲藍(映像制作会社スタジオブルー脚本家、プロデューサー)

「カジュアルに真面目に、映像(映画・ドラマ・番組)で伝える神社」
コメンテーター：・港千尋(多摩美術大学教授、写真家)

・田中雅一(国際ファッション専門職大学副学長、京都大学名誉教授)

司会：平藤喜久子(國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所長)

使用言語：日本語
参加費：無料
主催：國學院大學研究開発推進機構

日本文化研究所
共催：JSPS科研費(課題番号18H00615) 基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」(代表：平藤喜久子)
参加者：八〇名程度

本国際研究フォーラムは、日本の宗教文化を「撮る」ということにあるため焦点を合わせて企画された。まず様々な形で日本の宗教文化を「撮る」ことに関わっている三氏から報告を受けた。各報告者から寄せられた要旨を掲げる。

◇大河内智之「仏像の3D計測と「お身代わり仏像」―仏像盗難と地域社会の現在―」要旨

全国で仏像や神像など寺社に所蔵される文化財の盗難被害が発生している。被害の中心となっているのは、その文化財的価値を知られることなく、各地の集落に暮らす人々が心の拠り所として守り伝えてきた、身近に祀られる数多くの仏像である。こうした被害の増加には盗む側と盗まれる側の双方の要因が重なり合っている。盗む側の目的は換金である。オークションサイト等による入手の平易化は古美術品のマーケットを広げ、需要の増大のなか窃盗犯が跋扈し、卑劣な古美術商なども関与して市場に盗品を供給している。そしてもう一つの深刻な要因が、過疎集落の増加である。地域住民の高齢化と人口減少によるコミュニティの縮小により、集落の

寺社・堂祠を管理する担い手が不足し、犯罪の抑止力が低下している。こうした状況は、今後さらに深刻化していくことが確実である。

この十数年の間に仏像盗難被害が続発している和歌山県では、注意喚起などさまざまな対策を講じる中で、県立博物館と県立和歌山工業高等学校が中心となって、3Dプリンター製の仏像を「お身代わり仏像」と称し、防犯対策を講じることが難しい集落の堂宇に安置し、実物を博物館等で保管する取り組みを行っている。製作にあたっては、3Dスキャナーによるデータ修正、3Dプリンターを用いたデータ修正、3Dプリンターによる出力を高校で行い、着色作業は和歌山大学教育学部の学生が行っている。こうして完成した精巧な複製は、高校生と大学生が現地の集落を訪れ、住民とコミュニケーションを図って引き渡している。

そのように安置することで、「お身代わり仏像」が単なるレプリカではなく、生徒・学生やさまざまな人が関わり、集落のために造像された新たな仏像であるという固有の物語を背負っていることが地域住民に実感され、信仰の場の変容を最小限に留めることにつながっている。

信仰の根源となる仏像を撮影(3D計測)し造形(3Dプリンターによる出力)し、そこに固有の歴史性を投影することで、信仰の場を維持する取り組みである。

◇タイム・グラフ「いまドキュメンタリーを撮るとのこと―寺院のCOVID-19対応から考える―」要旨

ドキュメンタリーを撮るといことは、ストーリーを語ることを意味します。映像人類学の研究に取り組んでいる私にとっては、宗教研究のストーリーをドキュメンタリーとしてわかりやすく伝えるのが目的です。「仏教寺院がCOVID-19にどのような対応を取ったか」という疑問をもつて、最初は家を出ずにパンデミックと仏教についてインターネットで記事を探していました。また、二〇二〇年からより前の研究にインタビューした僧侶に連絡をして、メールやZoomを通じてインタビューしてみました。しかし、オンラインの方法では、寺院の実情を把握することに限界もありました。そのため、今年の春から遠くにある寺院ではなく、名古屋を中心に、寺院の現状を見に行きました。結果として、実際に現場に入る重要性、ドキュメンタリーの可能性も改めて理解できました。

新型コロナウイルスの感染拡大とともに、どのようにして宗教者は3つの密を避けるのかについて、メディアも学者もWeb法要やリモート瞑想などの可能性に焦点を当てました。宗教者のオンライン活動も確実に増加してきました。しかし、オンラインと対面の役割をきちんと検討するものは、現在においても少なく感じます。本発表の事例として、名古屋の大須にある万松寺を紹介しています。万松寺のコロナ対策について、「御朱印や写経、ネットでゲット」という題名で、朝日新聞デジタ

ル(二〇二〇年四月二十九日)の記事が次のように紹介しています。

「自粛ストレスの軽減にと始めたのが、家でお経を書き写したり、仏画に色をつけたりする「写経・写仏(しゃぶつ)チャレンジ」。寺のウェブサイトで素材をダウンロードできる。「…」できあがったら名前と住所を書いて寺へ郵送するか、境内の納経箱へ納めれば、後日、お焚き上げ祈禱をし、カード型お守り(縦5センチ、横3センチ)がもらえる。自粛要請が終わる頃合いを見て、終了する。」

これらの実践について調べるために、今年の春に万松寺に問い合わせました。驚くべきことに、オンラインや家でできる活動より、寺で行う実践の方が大事であると住職も参拝者も指摘しました。しかし、彼らの声はニュースに取り上げられていません。私は、オンラインと対面の活動の割合に関して、再検討が必要であると考え、短編ドキュメンタリーの制作を行いました。その一部をご紹介します。以下は事前にご覧いただけます(<https://vimeo.com/59890412>)。

今回の発表では、映像の単なる分析だけではなく、その成立過程も明らかにしたいのです。教育の手段としての「映像」の可能性を考えてきた私は、パンデミック状況下のフィールド・ワークにおける倫理的な問題をはじめ、ドキュメンタリーの計画、撮影の実施、編集とポストプロダクションの流れについて考察したいと思います。また、これまで発表したドキュメンタリーの配

信と海外における視聴者の反応について考察したいと思います。

私はこれまで数本のビジュアル・エスノグラフィを制作しており、そのうち東日本大震災をテーマにしたものは、ワルシャワやチューリヒなどの国際映画祭で上映されました。最近には、オンライン・ストリーミングの機会が増え、直接にネットで公開するのも主流となりました。寺院のCOVID-19対応から考えた映像を例に、映像の配信方法と注意点も明確にしたいと思います。

◇山映藍「カジュアルに真面目に、映像(映画・ドラマ・番組)で伝える神社」要旨

二〇一七年に制作した『茅ヶ崎物語』MY LITTLE HOMETOWN』という、「桑田佳祐というミュージシャンが誕生した茅ヶ崎にどんな秘密があるのか?」を探るといふ奇想天外な映画。私が神社好きになつたきっかけの作品です。桑田佳祐が茅ヶ崎に生まれた必然性を見つめるなんて無茶苦茶ですが、行き詰まった末にふと目に止まったのが寒川神社でした。寒川神社はかつて、相模国と呼ばれた領域の一之宮。今の茅ヶ崎が近いので、何か特別な土地なのでは……さらに、桑田さんが住んでいた近所に弁天様が祀られた神社が……など、私が見つけたパズルのピースを中沢新一先生が独自の理論で完成させ、映画ができました。

これを機に、一之宮すら知らない私が、知れば知るほど面白い神社に魅了され、NHK Eテレの「趣味ど

きっ!」という番組に神社をテーマにした企画を提案し、平藤先生の協力の元、番組を制作することになったのです。

実は番組だけでなく、映画やドラマには神社が関係しています。撮影に入る前、無事に撮ることを願う、神社でお祓いをしていただきませう。今回は、「趣味どきっ!」という番組だけでなく、私たち、映画やドラマを制作している者たちと神社について、また、他の撮影場所とは違う神社を撮影する際の配慮や難しさについてなどもお話できればと思っています。

私が出会った神社の神職の方々はお話好きばかり。自身のお宮について、神社のこれからについてなど語り始めると止まりません。そんな長話が大好きで、聞けば聞くほど神社が好きになります。どんな時代になろうとも神社という場所が存在する意味は変わらない。神社は変わらず人々に寄り添い、そこにある。そんな神社の思いを多くの人に伝え続けることが私に課せられた使命だと勝手に思い、カジュアルに、でも真面目に映像を制作し、これからも神社界の力になりたいと思っています。

三氏の報告を受けて、港氏と田中氏からコメントがあり、その後オンラインでの参加者からも質問を受けて質疑応答を行った。報告、コメント、質疑、いずれも充実した内容であり、実りの多いフォーラムとなった。

(文責・星野靖二)

研究開発推進センター 「渋谷学シンポジウム」東京渋谷を科学する ―歴史・民俗・宗教から見た渋谷学の今後、そして可能性―

研究開発推進センターでは、令和三年度研究事業「渋谷の歴史・民俗・宗教に関する研究」の一環として、渋谷学シンポジウム「東京渋谷を科学する―歴史・民俗・宗教から見た渋谷学の今後、そして可能性―」を実施した。当初は、令和二年三月四日の開催予定であったシンポジウムであるが、コロナ禍の影響によりこれを延期し、本年度のオンラインによる開催の運びとなった。

本シンポジウムの開催趣旨は、現在進行中の渋谷駅周辺地域の再開発などによる近年の様々な変化をも踏まえながら、「渋谷学」のこれまでの研究成果を歴史・民俗・宗教の各側面からそれぞれ振り返るとともに、コメンテーターを交えて、「渋谷学」の今後の課題や可能性を検討することにあった。開催方法としては、第一部は、録画した動画を令和三年十月二十八日～十一月六日に配信し、第二部は、ZOOMによるライブ配信を十一月六日に実施する形とした。

第一部では、上山和雄氏(本学名誉教授、研究開発推進機構客員教授)による基調講演をはじめ、手塚雄太氏(本学文学部准教授)、高久舞氏(帝京大学文学部専任講師)、秋野淳一氏(本学神道文化学部兼任講師)からの個別報告があり、第二部では、橋元秀一氏(本学経済学部

教授)、伊藤毅氏(青山学院大学総合文化政策学部客員教授)によるコメントの後、林和生氏(本学文学部教授)の司会による総合討議が行われた。

第一部 基調講演・個別報告

上山和雄氏の基調講演「渋谷学を振り返る」では、冒頭、國學院大學百二十周年記念事業として始まった「渋谷学」の出発点やその後の動向について、時系列で提示された。その上で、大学をめぐる社会背景の変化(大学による地域貢献・地域連携の動向等)についても言及しながら、これまでの事業を三期に区分し、二〇〇一年から二〇〇五年を「渋谷学」の第一期(研究会・公開講座)、二〇〇八年以降を第二期(公開研究会・シンポジウム・街歩き・叢書・ブックレット等)とした上で、長谷部区長が当選した二〇一五年以降の変化を見据えて、今後第三期の「渋谷学」が始まるだろうと述べた。特に、渋谷駅周辺地域の再開発が本格化するともに、区政の大きな転換が行なわれる現状において、今後の「渋谷学」は、こうした状況に対応していくことも必要になると指摘した。手塚雄太氏の第一報告「歴史から見た渋谷」では、「渋谷学」が対象としてきた「渋谷」を、「渋谷駅周辺で展開する「渋谷」」、「文教住宅

地区としての渋谷」の二つと捉え、「渋谷」の近現代史をこれらが形成されていく過程として提示した。また、歴史から見た「渋谷」の画期として、「一九一〇年代から二〇年代」「住みよい渋谷の形成」、「一九六〇年代から七〇年代」「副都心・繁華街としての渋谷の形成」、「二〇〇〇年代から現在」一面的に広がる「繁華街」としての渋谷の三つがある」と指摘。これらの担い手の変化等についても言及しながら、最後に、今後の「渋谷学」の課題として、民間ディベロッパーの動向に関する研究、継続的な資料調査、「渋谷」に住む人々の聞き取り調査などが考えられることを述べた。

高久舞氏の第二報告「民俗から見た渋谷」では、冒頭、「渋谷」の民俗文化を研究対象とする試みが倉石忠彦氏(本学名誉教授)による都市民俗学研究会によって始まったことを紹介。また、「渋谷」には多様なアクターが存在し、住民以外に、行政・企業・外来者等も文化の形成に寄与していることを指摘した上で、「渋谷」の伝承文化を把握していく必要性について述べた。そして、一九九〇年代から「若者の街・渋谷」として注目されたことを雑誌等の記述から分析した上で、「渋谷」において、消費をしない「若者文化」の連続性が見られること等を指摘。今後は、文化・経済・行政の求める「渋谷」の相違等も検討した上で、文化の連続性、伝承性について考えていく必要があると述べた。

秋野淳一氏の第三報告「宗教から見た渋谷」では、宗教学・宗教社会

学・神道学による研究蓄積を紹介した上で、宗教から見える戦後渋谷の画期として、一九四五年の終戦(神道指令等)、一九六四年前後(東京オリンピック、都市化)、一九七〇年前後(道玄坂神輿連合渡御、ジャンジャン等)、一九八〇年前後(新玉川線開通、109開業、金王坂等)、一九九五年前後(阪神淡路大震災、尾崎豊の歌碑等)、二〇一一年前後(東日本大震災等)があると指摘。「渋谷」の特徴については、平面型と立体型の「結集のための核」を併せ持った「ストリートの文化」を持つことにあると述べた。また、今後の課題については、悉皆調査や、研究成果の社会還元の模索等を提示した。

第二部 総合討議

橋元秀一氏のコメントでは、「渋谷」の変貌をどう捉えるのか(何から何へと変貌したのか)、現在進行中の渋谷再開発による「渋谷」の変化をどう考えるのか、今後「渋谷学」では何ができるのか等の問題提起があり、伊藤毅氏のコメントでは、渋谷研究による収穫や自らの研究の変化、「渋谷」とは何か、現在進行形の「渋谷」の変化に対する評価、コロナ後の「渋谷」の展望について等、登壇者に対する幾つかの質問が提示された。そして、これらのコメントをもとに、総合討議においては、各登壇者からの見解が提示され、今後の「渋谷学」の課題や可能性、さらには「渋谷」の未来や今後の展望について等、活発な議論が展開した。

(文責・宮本誉士)

國學院大學博物館

特別展「『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物―」

開催趣旨

令和二年(二〇二〇)は『日本書紀』編纂から一三〇〇年の年にあたり、また、大正九年(一九二〇)に本学で開催した『日本書紀』撰録千二百年記念会から一〇〇年の節目であった。

そこで、本展示では、神社と本学が所蔵する『日本書紀』の資料を中心に展示し、奈良時代の『日本書紀』成立から、中古・中世・近世を通しての神道古典としての『日本書紀』受容・研究史を概観する展示を行った。また、本学で『日本書紀』撰録千二百年記念の展覧会が行われていることから、本学における『日本書紀』研究の歩みを本学所蔵資料や出版物を通して展示した。

主催・後援

本展示は、本学博物館、研究開発推進センター、校史・学術資産研究センター主催のもと、神社本庁、公益財団法人日本文化興隆財団、一般財団法人神道文化会の後援を受けて開催した。

また、本展示の開催に際して、熱田神宮、神宮文庫、三嶋大社より貴重な資料をお借りして展示を行った。

会期

本展示は、平成二十八年度文部科

学省私立大学研究ブランディング事業「古事記学」の推進拠点形成―

世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―事業の一環として進められていたが、新型コロナウイルス感染症のため、令和二年の開催は延期となった。その後、研究開発推進センター、校史・学術資産研究センターで継続して準備が進められ、令和三年(二〇二二)に開催となった。

本展示は、新型コロナウイルス感染症対策を講じた上で、本学博物館の企画展示室・校史展示室で展示を行い、左記期間の水曜日から土曜日、十二時から十七時に開催した。

会期：令和三年九月十六日(木)
十一月十三日(土)
前期：九月十六日(木)～十月九日(土)
後期：十月十三日(水)
十一月十三日(土)

展示構成

【第1章】『日本書紀』の成立と展開
『日本書紀』は、日本最初の正史として、成立直後から朝廷において「日本紀講筈」が行われ、多くの写本や注釈書が作られた。そこで、第1章では『日本書紀』編纂当時の時代背景を知るための展示資料とともに、熱田神宮に奉納された熱田本『日本書紀』など『日本書紀』成立と神社における受容についての展示

を行った。

【第2章】『日本書紀』と神道思想

『日本書紀』は、中古・中世にかけて、神道の立場からのみならず、仏教や儒教の立場からも神道の本義を明らかにするための重要な文献「神典」として扱われた。第2章では、三嶋本『日本書紀』や道祥本『日本書紀私見聞』をはじめ、卜部氏による『日本書紀』注釈書など、中古・中世における『日本書紀』と神道思想との関わりを展示した。

【第3章】『日本書紀』の出版

『日本書紀』は、成立以降、多くの写本が作られ、特に、中世における卜部氏の活動を経て、卜部系の写本が流布していくこととなる。それを承け、近世には卜部系諸本に基づく『日本書紀』の出版が行われるようになった。第3章では、近世の『日本書紀』版本を中心に江戸時代における『日本書紀』の出版活動についての展示を行った。

【第4章】『日本書紀』と国学・國學院

近世に入り、出版が隆盛したことで、国学者による『日本書紀』研究が盛んとなった。国学者による『日本書紀』研究は、皇典講究所・國學院に引き継がれ、大正九年には、本学で『日本書紀』撰録千二百年記念会が開催された。第4章では、国学者による『日本書紀』注釈とともに、『日本書紀』撰録千二百年記念会の資料や本学の出版物など、国学者の研究と、それを承けて行われてきた本学の『日本書紀』研究の歩みを示す展示を行った。

オンラインでの発信

本展示では、本学博物館のYouTubeチャンネルで、オンラインミュージアムを発信するとともに、動画サイトニコニコ動画のニコニコ美術館で、本展示の解説放送を行った。

・オンラインミュージアム

「特別展「『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物―」を展示解説!」、渡邊卓(本学研究開発推進機構准教授)、令和三年十月二日(土)

・ニコニコ美術館

「特別展「『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物―」(國學院大學博物館)を巡ろう!」、笹生衛(本学博物館館長・教授)、渡邊卓(本学研究開発推進機構准教授)、橋本麻里(公益財団法人永青文庫副館長)、令和三年十月十三日(水)

展示図録

展示図録『特別展「『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物―」(全六十頁)を刊行した。
(文責・渡邊卓)



國學院大學博物館
企画展「ホワッツ神道—神道入門—」
What Is Shinto? — Introduction to Shinto —

■展示趣旨

本展は、身近にある日本文化の一つとして、神道や神社についての理解と関心を深めることを企図し、「神道と神々」「神社と祭り」「現代文化と神道」という3つの大きなテーマに沿って、関係資料を展示・解説したものである。

■開催概要

開催の概要は左記のとおりである。
会期：令和三年七月七日～九月十一日
主催：國學院大學博物館
共催：國學院大學神道文化学部／同

研究開発推進機構日本文化研究所／同学術資料センター(神道資料館部門)／カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校(Fabio Rambelli 研究室)／JSPS科研究費(課題番号18H00615) 基盤研究(B)「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」(代表：平藤喜久子)

展示：展示に当たっては、すべてのパネル・キャプションの言語表記を日英併記とした。翻訳は、後述する関連短編動画の英語字幕とともに、エリック・シッケタンツ(本学助教)の担当による。

■関連動画

神道への理解を深めるコンテンツとして、三本の短編動画および一本の展示解説動画を作成し、当館のOnline Museum (YouTube) 上で公開した。題名と各ナビゲーターは、次のとおり。

【短編動画】「参拝作法を知る！How to pray to the kami」(神社お参り前の1分で確認) (鈴木聡子・本学助教)、「狩衣を着る！How to wear a kariginu (Robe of Shinto Priest)」(田中潤・当館客員研究員)、「御幣を作る！How to make a gohei (Offering used at Shinto rituals)」(吉永博彰・本学助教)。

【展示解説】「絵巻を解く！」(笹生衛・当館館長、本学教授)。
■刊行物

展示図録(B5判・全20頁)一冊を刊行した。基本的な構成やテーマは展示に準じるが、本書は神道や神社を学ぶための入門書・神社参拝のハンドブックというコンセプトで作成されている。表示言語はすべて日英併記とし、カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校(Fabio Rambelli)教授と同研究室のメンバーが翻訳を担当した。このほか本書には、コラム3編および関連動画の二次元コード等を収録している。



展示チラシ表面・ポスター

(文責・吉永博彰)

國學院大學博物館
企画展「アイヌプリー—北方に息づく先住民族の文化—」

ウポポイ・国立アイヌ博物館の開

館や、人気マンガ『ゴールデンカムイ』の影響もあるのだろう。近年、日本列島の先住民族であるアイヌ民族に、多くの注目が集まっている。しかし、これまでアイヌ文化研究と國學院大學の関わりについては、あまり大きく取り上げられてこなかった。

明治以降、日本の「国民」として同化政策がとられてきたアイヌ民族。文化や言語の多様性は、近代的な国家形成の前に立ち塞がる障壁の一つとされ、「国語」が創出されてゆく明治三十年代には、既に民族固有の文化は衰微の一途を辿っていた。後に本学教授となる言語学者の金田一京助が、失われつつあったアイヌ民族の言葉や習俗の記録に取り組み始めたのは、このような時代の出来事である。その後も、金田一の教え子であった久保寺逸彦がアイヌ口承文芸の採集と研究を進めるなど、初期のアイヌ文化研究において國學院大學の関係者が果た



(文責・深澤太郎)

してきた役割は大きい。
そこで國學院大學博物館では、二〇一九年の「アイヌ新法」成立と、二〇二〇年の国立アイヌ民族博物館開館、そして今年度の金田一・久保寺没後五十年を受けて、当館の渡辺紳一郎氏旧蔵アイヌ民族関連資料や、本学北海道短期大学部が所管する金田一記念文庫に収蔵された貴重書を、図書館所蔵資料とともに紹介することとした。
特に、「北海道」の名付け親で知られる松浦武四郎が作った巨大な「東西蝦夷山川地理取調図」や、江戸期の通詞らが残したアイヌ語辞典、金田一京助・久保寺逸彦が残した研究資料などが特に目をひくもの。文字を持たなかったアイヌの人々は、自ら記録を残さなかったため、和人の目を通したものはあるものの、近世のアイヌ絵『蝦夷島奇観』なども貴重な資料である。また、北海道短期大学部が制作したペカシベ祭(菱の実の収穫祭)の様子が収録した動画も放映。コロナ禍に見舞われた中ではあったが、二〇二一年十一月十八日(木)～二〇二二年一月二十二日(土)の会期に、一日百名ほどの来館があり、好評を博した。図録は一冊千円にて頒布(本学の学生は二百円割引)。

令和三年度 國學院大學博物館活動報告

一、活動報告

令和三年度は、博物館の展示・公開として、特別展・企画展を五回、特集展示を一回開催した。新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、昨年度に引き続き、短縮開館（水・土曜日・十二時～十七時）の形態で運営を継続した。館内における基本的な感染対策も、昨年度の体制を継続して運用した。

企画展等の内容は、昨年度に計画変更（緊急閉幕・延期）したものが、五本のうち三本を占めた。その内訳は、特別列品「神の新たな物語―熊野と八幡の縁起」、企画展「ホワッツ神道―神道入門」、特別展「『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物」である。展示と連動したイベントはオンラインで実施し、当館YouTubeチャンネル「オンラインミュージアム」にて、ミュージアムトークなどの動画を配信した。また、特別展「都の神やしろとまつり―世界遺産 賀茂別雷神社の至宝―」では、研究会・講演会もオンラインで実施予定である（令和四年一月末日現在）。その他、昨年度までに実施してきた博物館の基盤強化のための施策（展示の再構成、ミュージアムシヨップの運営、環境整備など）を継続・推進した。

二、展示公開 (表1)

【特別展・企画展・特集展示】

・特別列品「神の新たな物語―熊野と八幡の縁起」(図録刊行)、会期：令和三年五月十三日～七月三日。主催：当館。

・企画展「ホワッツ神道―神道入門」(図録刊行)、会期：令和三年七月七日～九月十一日。主催：当館。

・特別展「『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物」(図録刊行)、会期：令和三年九月十六日～十一月十三日。主催：当館、本学研究開発推進センター、本

表1 令和3年度 展示内容と関連事業

展示 (会期)	関連事業
特別列品～神の新たな物語―熊野と八幡の縁起～ (R3.5/13～7/3)	オンラインミュージアム 6/5 新井大祐 (本学准教授)「特別列品『神の新たな物語―熊野と八幡の縁起』を特別解説！#1」 大東敬明 (本学准教授)「同#2」
ホワッツ神道―神道入門― (R3.7/7～9/11)	オンラインミュージアム 7/7 鈴木聡子 (本学助教)「参拝作法を知る！How to pray to the kami～神社お参り前の1分で確認～」 田中潤 (本学客員研究員)「狩衣を着る！How to wear a kariginu (Robe of Shinto Priest)」 吉永博彰 (本学助教)「御幣を作る！How to make a gohei (Offering used at Shinto rituals)!!」 7/31 笹生衛 (当館館長・本学教授)「絵巻を解く！」
『日本書紀』撰録1300年―神と人とを結ぶ書物― (前期：R3.9/16～10/9、後期：R3.10/13～11/13)	オンラインミュージアム 10/2 渡邊卓 (本学准教授)「特別展『『日本書紀』撰録1300年―神と人とを結ぶ書物―』を展示解説！」
アイヌプリー―北方に息づく先住民族の文化― (R3.11/18～R4.1/22)	オンラインミュージアム 12/11 内川隆志 (本学教授)・深澤太郎 (本学准教授)・佐々木利和 (北北海道大学アイヌ・先住民研究センター客員教授)・高橋由彦 (本学北海道短期大学部講師)「企画展『アイヌプリー―北方に息づく先住民族の文化―』を展示解説！」
都の神やしろとまつり―世界遺産 賀茂別雷神社の至宝― (R4.1/27～3/26)	オンラインミュージアム 2/19 田中安比呂 (賀茂別雷神社宮司)「特別展『都の神やしろとまつり』を賀茂別雷神社田中宮司が特別解説」(予定)
	研究会 (オンライン) 講演会 (オンライン) 2/12 「賀茂別雷神社研究の現在」(予定) 3/5 熊倉功夫 (一般財団法人 葵プロジェクト代表理事)「神饌からひもとく食文化の源流」(予定)
特集展示 高倉家調進控 御所に仕えた女性の装い (R3.7/7～R3.7/24)	

特別展・企画展

特集展示

学校史・学術資産センター。＊
・企画展「アイヌプリー―北方に息づく先住民族の文化―」(図録刊行)、会期：令和三年十一月十八日～令和四年一月二十二日。主催：当館。

・特別展「都の神やしろとまつり―世界遺産 賀茂別雷神社の至宝―」(図録刊行)、会期：令和四年一月二十七日～三月二十六日。主催：賀茂別雷神社、当館。＊
(※は国指定重要文化財の借用を伴う。特集展示については表1を参照)

三、教育普及

教育普及事業では、展示公開に関連するミュージアムトーク、研究会、講演会をオンライン配信の形態で実施した(内容・公開日は表1を参照)。また、本学考古学研究室と連携し、長野県穂高古墳群の発掘調査(考古学実習)の現地説明会をライブ配信

し、調査成果の出張展示(於国営アールプスあづみの公園)に参画した。
四、環境整備・営繕

関連のガイドラインを踏まえ、新型コロナウイルス感染症拡大防止の各種対策を継続的に実施した。また、展示空間の空気質・温湿度を良好なレベルに維持させるための施策やIPM(総合的有害生物管理)を実施し、資料保護・管理運営の質的向上に取り組んだ。

五、運営支援

ミュージアムシヨップの配送販売は、これまで定額小為替による支払いのみであったが、コンビニ支払いでの入金方法も導入した。これにより、遠方からの購入依頼が増加した。また、ウェブサイトを、SNS、外部サイトで積極的な情報発信を行い、来館者などから多数の反響が寄せられた。
本年度の入館者数は、令和四年一月末日現在、約一万三千人となっており、コロナ禍においても一日平均八十四人の来館実績を得ている(表2)。未だ終息が見込めない状況ではあるが、実際の展示とオンラインの双方で工夫を凝らしながら、本学の研究および学術資料の公開・活用を推進する博物館運営を目指していく。

(文責：國學院大學博物館)

表2 令和3年度入館者数

月	(名)
4月	1,817
5月	818
6月	1,300
7月	1,358
8月	440
9月	1,180
10月	1,555
11月	1,851
12月	1,634
1月	1,305
合計	13,258

表1・2ともに令和4年1月末日現在

彙報

会議

○全体

- ・令和三年度臨時運営委員会、令和三年七月七日(水) ～七月八日(木)、メール審議
- ・令和三年度第二回運営委員会、令和三年九月二十二日(水)、若木タワー地下一階会議室○二
- ・令和三年度臨時運営委員会、令和三年十月四日(月) ～十月七日(木)、メール審議
- ・令和三年度第三回運営委員会、令和三年十一月二十五日(木)、若木タワー地下一階会議室○二
- ・令和三年度第四回運営委員会、令和四年一月十三日(木)、若木タワー地下一階会議室○二
- ・令和三年度第二回企画委員会、令和三年七月七日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和三年度第三回企画委員会、令和三年九月十七日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和三年度臨時企画委員会、令和三年十月一日(金) ～十月四日(月)、メール審議
- ・令和三年度第四回企画委員会、令和三年十一月十日(水) ～十一月十二日(金)、メール審議
- ・令和三年度第五回企画委員会、令

- 和四年一月十二日(水) ～一月十三日(木)、メール審議
- ・令和三年度第二回人事委員会、令和三年七月七日(水)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和三年度第三回人事委員会、令和三年八月三日(火)、オンライン会議
- ・令和三年度第四回人事委員会、令和三年九月十七日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和三年度第五回人事委員会、令和三年十月二十六日(火) ～十月二十七日(水)、メール審議
- ・令和三年度第六回人事委員会、令和三年十一月十七日(水)、若木タワー地下一階会議室○三
- ・令和三年度第七回人事委員会、令和三年十二月二十二日(水) ～十二月二十四日(金)、メール審議
- ・令和三年度第二回教員等資格審査委員会、令和三年九月十七日(金)、AMC棟五階会議室○六
- ・令和三年度第三回教員等資格審査委員会、令和三年十一月十七日(水)、若木タワー地下一階会議室○三

○三

○日本文化研究所

- ・令和三年度第二回所員会議、令和三年六月三十日(水)、オンライン会議
- ・令和三年度第三回所員会議、令和三年八月三十日(月)、オンライン会議
- ・令和三年度第四回所員会議、令和三年十月二十七日(水)、オンラ

イン会議

- ・令和三年度第五回所員会議、令和三年十二月二十二日(水)、オンライン会議

○学術資料センター

- ・令和三年度第二回学術資料センター会議、令和三年九月二日(木)、オンライン会議

○校史・学術資産研究センター

- ・令和三年度第一回校史・学術資産研究センター会議、令和三年七月七日(水) ～七月十三日(火)、持ち回り
- ・令和三年度第二回校史・学術資産研究センター会議、令和三年九月一日(水)、オンライン会議

○研究開発推進センター

- ・令和三年度第二回研究開発推進センター会議、令和三年八月二十七日(金)、オンライン会議

○國學院大學博物館

- ・令和三年度第二回國學院大學博物館会議、令和三年九月二日(木)、オンライン会議

公開講座・講演会・シンポジウム・関連学会

○全体

- ・オンライン公開講座「蒙古襲来の実態とその影響」、令和三年十二月十日(金) ～令和四年三月三十一日(木)、オンデマンド配

信、①令和三年度研究開発推進機構公開学術講演会「水中考古学による蒙古襲来研究」、講師〓池田榮史(國學院大學教授)、②第46回日本文化を知る講座「蒙古襲来の影響を多角的に考える」、講師〓比企貴之(國學院大學特任助教)・大東敬明(國學院大學准教授)・齋藤公太(神戸大学大学院講師)

○日本文化研究所

・国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮るCapturing Japanese Religious Culture」、令和三年十二月十一日(土) 十三時三十分～十七時三十分、オンライン開催、講師〓ティム・グラフ(南山大学助教)、大河内智之(和歌山県立博物館主任学芸員)、山咲藍(映像制作会社スタジオブルー脚本家、プロデューサー)、コメンテーター〓港千尋(多摩美術大学教授、写真家)、田中雅一(国際ファッション専門職大学副学長、京都大学名誉教授)、司会〓平藤喜久子(國學院大學教授)

・国際研究フォーラム関連講演会「日本と宗教：一生の追憶」、令和三年十一月二十七日(土) 十五時～十七時、オンライン開催、講師〓ヘイヴンズ・ノルマン(國學院大學名誉教授)

○研究開発推進センター

・令和三年度オンライン渋谷学シンポジウム「東京渋谷を科学する」歴史・民俗・宗教から見た渋谷学

の今後、そして可能性」)、第一部 十月二十八日(木) 十一月六日(土)、録画配信、第二部 令和三年十一月六日(土) 十七時 十八時二十分、ライブ配信、講師 上山和雄(國學院大學名誉教授)、報告者 手塚雄太(國學院大學准教授)、高久舞(帝京大学専任講師)、秋野淳一(國學院大學兼任講師)、コメント 伊藤毅(青山学院大学客員教授)、橋元秀一(國學院大學教授)、司会 林和生(國學院大學教授)

・南開大学・国際オンライン学術講演会(全球南開「云中讲堂」学術講座)「『日本書紀』一三〇〇年の受容史」、令和三年十二月十七日(金) 十四時 十五時三十分、ハイブリッド講座(会場 外国語学院一〇教室)、講演者 渡邊卓(國學院大學准教授)、主催 南開大学外国語学院東アジア文化研究センター

出張

○学術資料センター

・深澤太郎、「館蔵資料の科学分析に係る打ち合わせ」のため、令和三年十二月六日(月) 十二月七日(火)、兵庫県尼崎市

・池田榮史・内川隆志・深澤太郎・楠恵美子・渡辺夏海、「弥生時代開始期をめぐる研究に係る遺跡巡検」のため、令和四年一月七日(金) 一月十日(月)、熊本県玉名市・長崎県南島原市・松浦市

福岡県新宮町他

○校史・学術資産研究センター

・渡邊卓、「甲南女子大学における折口信夫講義ノートの調査」のため、令和三年十月三日(日) 十月四日(月)、兵庫県神戸市

○研究開発推進センター

・松本久史・宮本誉士、「指定寄附金等、研究開発推進センター研究事業に関する院友神職会との打ち合わせ」のため、令和三年九月二十八日(火)、東京都・明治神宮

○國學院大學博物館

・及川聡・佐々木理良・尾上周平、「穂高F9号墳発掘調査(本学考古学研究室実施)における出土品展示・現地説明会の展示指導・ライブ配信」のため、令和三年八月十一日(水) 八月十二日(木)、長野県安曇野市

・渡邊卓、「特別展『『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物―』における展示品集荷」のため、令和三年八月二十八日(土) 八月三十一日(火)、三重県伊勢市、愛知県名古屋市中熱田区、静岡県三島市

・深澤太郎・佐々木理良、「アイヌプリ展の実施に係る資料調査及び集荷」のため、令和三年十月四日(月) 十月六日(水)、北海道滝川市

・渡邊卓、「特別展『『日本書紀』撰録一三〇〇年―神と人とを結ぶ書物―』における展示品返却」のため、令和三年十一月十五日(月) 十一月十六日(火)、静岡県三島市、愛知県名古屋市中熱田区、三重県伊勢市

・加瀬直弥・大東敬明、「特別展『都の神 やしろとまつり』資料調査・確認・打ち合わせ」のため、令和三年十一月七日(日) 十一月八日(月)、京都府京都市

・大東敬明「特別展『都の神 やしろとまつり』資料調査・確認・打ち合わせ」のため、令和三年十一月二十日(土)、京都府京都市

・大東敬明「特別展『都の神 やしろとまつり』集荷」のため、令和四年一月二十一日(金) 一月二十三日(日)、京都府京都市

刊行物

○全体

・研究開発推進機構『機構ニュース』通号二十九(令和三年六月二十五日発行)

物」における展示品返却」のため、令和三年十一月十五日(月) 十一月十六日(火)、静岡県三島市、愛知県名古屋市中熱田区、三重県伊勢市

資料紹介 澁沢栄一書翰

本書翰は、澁沢栄一が國學院大學出版部で刊行された『国文学註釈全書』（明治四十年〜四十三年（一九〇七〜一〇）刊行）の完成に際して、田島信夫に宛てた購読を勧める書翰である。

昨今、澁沢栄一は大河ドラマ「青天を衝け」の主人公として、また令和六年（二〇二四）には新一万円札の肖像になることなどで、耳目を集めている。澁沢は幕末から昭和までを生き、多くの企業に携わったことは言を俟たないが、実は國學院大學の歴史とも深く関わる人物なのである。

本学は明治三十五年（一九〇二）、三十九年（一九〇六）に二度の火災に遭い、復興と規模拡張を企図して、明治四十年（一九〇七）二月十一日付で「國學院大學拡張趣意書」が皇典講究所長・國學院大學長の佐佐木高行によって頒布された。このとき協力者たる「賛襄」として、公爵・子爵・男爵など名だたる人物五十四人が委嘱され、そのなかに「男爵 澁沢栄一」の名もあった。澁沢はこれを契機として、翌年二月には皇典講究所顧問に就任し、以後、事業拡張に尽力することとなった。

本書翰に登場する『国文学註釈全書』は、本居豊穎・木村正辞・井上頼因が校訂し、『万葉集』や「延喜式祝詞」など国文・神道にわたる日本文典の注釈を集成した書籍として、明治四十年（一九〇七）九月に帝國書院から刊行された。明治四十一年（一九〇八）二月には、國

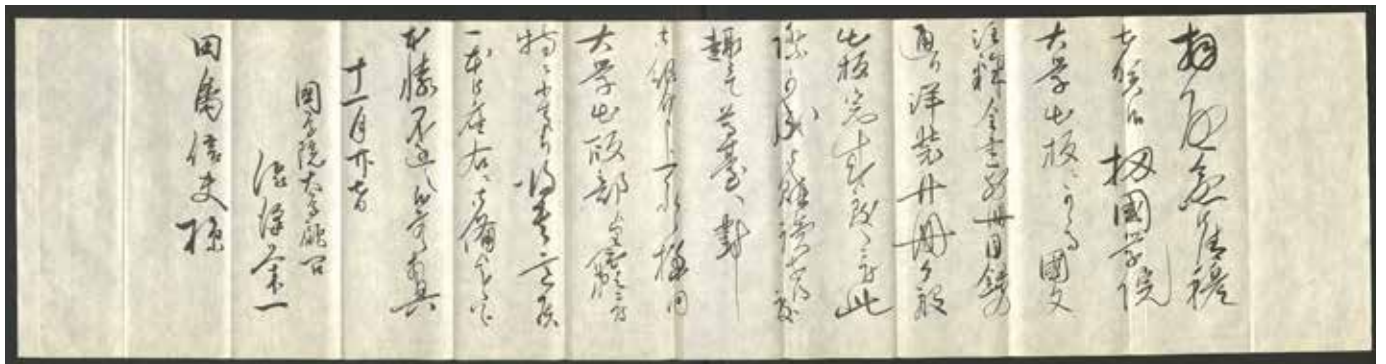
學院大學出版部が新設され、以降、『国文学註釈全書』は國學院大學出版部から刊行されることとなる。本書翰は、『国文学註釈全書』全二十冊の完成に際して、澁沢栄一から田島信夫に宛てたものであり、『国文学註釈全書』全二十冊の出版完成の旨が記されていることから、明治四十三年（一九一〇）十一月にしたためられたものであると考えられる。なお、封筒には、送付先の住所が記されていないことから、郵送された書翰ではないことが分かる。

この時、國學院大學出版部は、前年六月に刊行を開始した児童雑誌『兄弟』『姉妹』に端を発する経営不振により、多額の負債を負っていた。これによって、本学の存続も危ぶまれるほどであった。そのため、澁沢は出版部の依頼を承けて、田島に購読を勧める書翰を送ったのである。

田島信夫は、東京電灯株式会社、東武鉄道株式会社、北海道炭礦鉄道会社、台湾製糖株式会社、大阪商船株式会社などの重役を歴任した人物であり、澁沢の後任としても財界で活躍した。

書翰に端的に表れているように澁沢の尽力もあり、國學院大學出版部の負債は大正二年（一九一三）には完済された。

本書翰からは、日本資本主義の父として、近代日本の経済基盤を構築する澁沢栄一の本学顧問としての活動を窺い知ることができよう。



田島信夫宛澁沢栄一書翰



封筒裏



封筒表

【翻刻】
（封筒表）「田島信夫様」
（封筒裏・氏名印）「澁沢栄一」

拝啓、愈御清穆
奉賀候、扱國學院
大學出版二かゝる国文
注釋全書、別冊目録の
通り洋装廿冊、今般
出版完成致候二付、此
際可成御購読を得度
趣二て、尊臺へ對し
御紹介申上くれ候様同
大學出版部より依頼二付、
特二小生より得貴意候、
一本御座右二御備被下候ハ、
本懐不過之候、草々拜具

十一月廿七日

國學院大學顧問

澁澤栄一

田島信夫様

（文責・渡邊 卓）